

## コロナ禍でコロコロと見解を変えていった中国の感染症専門家【洞察☆中国】

2/5 時事通信社 日中福祉プランニング代表・王 青

中国政府の「ゼロコロナ」政策に対する抗議デモの参加者と、排除しようとする警察官＝  
2022年11月27日、中国・上海【AFP時事】



中国の四川省に有名な伝統芸能「変面」というのがある。変面師が手や扇子を顔にかざし、  
臉譜（お面）が瞬時に次々と変わっていくという高い技である。四川省の成都や重慶など  
を観光すれば、「変面」ショーをあちこちで楽しむことができる。

中国は、2020年から3年間にわたり、新型コロナウイルスの感染拡大を抑えるため、  
厳しい「ゼロコロナ政策」を続けてきた。

しかし、経済の急速な低迷に加え、昨年11月末ごろから各地で相次いで抗議活動が発  
生し、12月に政府は突如コロナ対策を方針転換した。「感染予防措置をさらに改善するこ  
とに関する通知」（新10条）を発表し、これまでの「ゼロコロナ」政策を一気に解除した。

### ◆喜びもつかの間

やっと「自由」になった人々の喜びは、つかの間だった。全国に感染爆発が起こり、筆  
者の中国在住の知り合いがほぼ全員感染と聞いて驚いた。

多くは症状が重く、「高熱が1週間続いた」「頭が割れそう、喉がナイフで刺されるよう  
に痛い」と訴えた。感染者が日に日に増えるにつれ、感染症や公衆衛生の専門家たちへの  
批判や失望が強まっていった。

これまで、これら専門家は冒頭の「変面」のように、コロコロと見解を変えていたから  
だ。

例えば、中国のウイルス学者、高福氏は、19年12月に新型肺炎コロナウイルスにつ  
いて、中国国内のメディアで「ヒトからヒトへの感染の証拠はまだない」と言いながら、  
海外で発表した論文に「未確認肺炎のヒトからヒトへの感染が発生した」と書いたことが、  
その後、中国で非難された。

もう一人、感染症研究の第一人者で呼吸器専門医の鐘南山氏は、中国で「SARSの英雄」と呼ばれる人物である。03年にSARSが猛威を振るった際、官製メディアが「ウイルスをコントロールできている」と報じたことに対し、彼は否定し、いち早く警鐘を鳴らした。

こんな彼であるが、20年初めにコロナの感染が始まったばかりの時に、武漢市当局が情報を公表したタイミングを擁護して「中央政府が検査結果を承認するまで待つしかない」「4月ごろに終息」など、楽観的な発言を連発した。

そして、中国の「蓮花清瘟」という漢方薬が「コロナ感染の予防に効果がある」と発言したため、薬が爆発的に売れた。その後、彼は製薬会社と癒着があるとの指摘があった。

#### ◆まるで手のひら返し

昨年春から2カ月間、中国の最大経済都市、上海市で「ロックダウン」が実施されていた際、専門家らがテレビに出演し、「オミクロン株はインフルエンザの7～8倍の発病率」や「オミクロン株による死亡の可能性は、デルタ株よりも高い」「オミクロン株の後遺症は深刻。記憶力が減退、味覚障害を起こす。男性なら性機能が無くなる可能性がある」など、の見解を世間に向けて発信した。

こうして、中国の人々は「コロナの怖さ」を植え付けられ、故にコロナを「正しく恐れる」方法を知らないままにいた。

ところが、12月以降、政府の政策の転換に、多くの専門家はまるで「手のひら返し」のように、「変異株の病原性と毒性は明らかに弱まった。現在のウイルスはこれまで以上に『温和』になった」「オミクロンはひどくない、後遺症はない」「若い人は薬を飲まなくても治る」と、次々に発言した。

一夜にして全く違った見解を示したことで、世間が騒然となった。専門家の「変節」に国民の不信感が高まり、失望したという。SNSでは「節操がない」「ウイルスより変異が速い」などの非難の声があふれた。

もちろん、3年間、主張が一貫している専門家も少なからずいる。その代表の一人は、復旦大学附属華山医院感染科主任の張文宏教授である。彼は「免疫力を高める方法」や「ウイズコロナの必要性」などを発信し続けてきた。ネットでたたかれたこともたびたびあったが、多くの国民から支持を集めている。

「せめて偽りの発言をしない」。多くの国民が「専門家」に望んでいることだ。

(時事通信社「金融財政ビジネス」より)